

## 語彙指導に関する1つの工夫

—— 帰納的な Meaning Vocabulary Strategy を用いて ——

古 家 貴 雄\*

(平成3年10月31日受理)

### 要 旨

リーディングにおける読解ストラテジーとして以前より学習者に対して有効であると考えられている語彙認知のための文脈の手がかり (context clue) の利用について、今の日本の英語教育現場への応用可能性を中心として考察する。その有効度について、主として過去の実験的考察を概観しながら、現場の状況を踏まえた上での1つの context clue ストラテジーの指導アプローチを提案することを本稿の目的とする。なお、その方法は帰納的なアプローチである。

### KEY WORDS

context clue	文脈の手がかり	direct approach, indirect approach	直接的・間接的方法
schema	スキーマ	background knowledge	背景的知識

### 1. は じ め に

この3月まで高校の現場にいて、大きな課題として絶えず存在していたことは、いかにして生徒に効果的に語彙を身につけさせるかということであった。中学時代に、かなり語彙の数を制限されながら、structural な面の操作を中心に指導されてくる生徒達にとって、高校に入学してはじめて驚き、音を上げてしまうことの1つは、かなり多量の語彙をその語法も含めて学習しなければならないことのようなのだ。一方で発信型の英語教育ということが叫ばれ、speaking や listening の指導がクローズアップされているにもかかわらず、実際に現場では大学入試も含め reading の指導にウエイトがおかれるのが現実である。従来、主として生徒の個人的な学習(家庭学習も含めて)に任されていた語彙の学習も、その体系性や指導法について、あらためて教師の側で再考されるべき時期にきているのではないか、そういう発想に基づいて本テーマについての指導の試案とその実践を報告することにした。

### 2. Readingにおける語彙力の影響(1つの実験を通して)

前任校では、英単語コンテストというのを実施していた。1冊の単語集を4月の段階で生徒に配布し、範囲を決めて、年5回に分けて行なわれる単語テストである。1年間の後半になる

---

\* 言語系教育講座

とかなりマンネリ化し、当初の意義を忘れてくる生徒も現れはじめるので、1度、語彙力と英文の理解度との関係についての実験を彼らの眼前で実施し、英単語テストの意義をあらためて証明したことがある。1枚のプリントに長文と、その内容に関する正誤問題や、部分訳、それにイディオムなどに関連した問題を集めて印刷したものを生徒に配布した。長文は400語程度のもので、まず手始めに、生徒自身の未知語すべてにアンダーラインを引かせた。これは、全文章中、全語彙の中で未知語の占める割合を調査するものである。過去の研究においては、文章の理解において支障をきたし始める未知語の割合として、15% (Marks et.al. 1974), 8% (Freebody and Anderson 1983), 7% (Holley 1973; kameenui et.al. 1982), 2% (West 1941) 等の様々な報告があるが、一応、今回は10%の new word density を設定して調査した。つまり生徒を実際に未知語が40語以上ある者と、それ以下の者とに分け、その後、長文に関する問題をやらせて結果を見てみたのである。すると驚いたことに、クラス44人のうち、未知語10%以下の17人中、問題正答率70%以上を記録した者は15人で、逆に10%以上の27人中、70%以上の得点者はわずか2人であった。

語彙がわからなければ、英文を読んで理解できないというのは、当たり前のことであるが、これほどはっきりした結果があらわれるとは思わなかった。もちろん生徒自身も、語彙力の有無が文章の理解に関して、決定的な影響力をもつという認識はかなり持っていると思われるし、教師もその考えは同じであろう。しかしながら、単語を覚えるということは、ともすればかなり単調な作業であるので、生徒にとっては無味乾燥な努力だと受け取られがちであり、その遂行にはかなりの忍耐を要求されるものである。また、最初に述べたように、語彙については、教師の側にとっても、授業の中で新出語句として説明することが主で、その後は生徒個人の学習に委ねられるケースが多く、Judd (1978) も述べているように、語彙指導というものは、伝統的に学習者の文法の習得を妨げるものとして、第二義的地位に置かれてきたと言っても過言ではないだろう。

### 3. 語彙指導の2つのアプローチ

伝統的に見て、これまでの語彙指導をそのアプローチとして大別すると、次の2つになる。1つは direct approach, もう1つは indirect approach である。前者は、文脈の中でにせよ、独立してにせよ、語彙そのものに意識的に注意を払って指導していくやり方である。具体的には、単語の形と意味のリストを学習者に与えたり、接辞・語幹といった単語分析を中心として語彙自身に焦点を当て、指導の対象として位置付けていく。一方後者は、語彙指導を reading や listening などのいわゆる4技能の習得を通して行ない、語彙を付随的に「自然」な文脈の中で身につけさせるという考え方である。両者は日常の授業の中では相補的に用いられるのが普通であるが、その理由として、前者は新出語句を多量に短期間のうちに覚えることや、また、意味連想に有益な類語のネットワークを学習者の中に形成するのに有利であること、しかし一方、語法やニュアンスなどは身につけにくい、また後者は、主として文脈の中で語彙を身につけるため、その語の持つニュアンスや語法を文脈と結びつけてマスターでき、またそのため、記憶の保持にも有利である、その代わり、短所としてその効果が出るのには比較的長い時間を要するなど、それぞれ一長一短があるからである。一般的には、その折衷策として、たくさんの語

彙のリストを短い文章と一緒に覚えるという方法もしばしばとられることになる。

#### 4. Context clueを利用したmeaning vocabulary strategy

以上の2つのアプローチは別の言葉で言えば、新出語句や未知語を習得する際に文脈を離れて独立した形でマスターする方法と文脈を利用しながらマスターする方法ということになる。前者は主に語彙のリストを与えて、word pair (外国語→その翻訳) として覚えるもので、過去の研究では、この方法は実際には語彙の定着率や保持率も良く、文脈中で覚えたものと比べても、それほど遜色はないとの報告もある (Lado, Baldwin and Lobo 1967; Gershman 1970)。したがって、後者の主に context clue を利用した未知語推測のストラテジーを生徒に教える方法というのは、確かに語の意味範囲を覚えるという意味では有効であるが、長い時間をかけた努力の割には、マスターできる語彙数も少なく、また、基本的に1つの文中に他の未知語がたくさんあってはそのストラテジーも機能しないということもあり、どのレベルの生徒にも有益なわけではない、という面がある。しかしながら、生徒をいつまでも辞書に頼らせているのではなく、一日も早く fluent reader として一人立ちしてもらいたいという意味から、敢えてこの方法に挑戦してみることにした。なぜならそのような reader は、未知語の意味を推測するために役立ちそうな clue (graphonic, syntactic, semantic) はすべて使うと言われ (Tierney et. al. 1985), good reader と poor reader を分ける1つの要因は文脈の手がかりをいかにうまく活用できるかにかかっていると言っても良いからである (高梨・高橋1987)。context clue を利用した未知語推測の指導の必要性ということは、以前からよく言われていることではある。しかし、その指導方法を演繹的方法と帰納的方法の2つに分けるとすると、主にこれまでは、あらかじめ幾つかのタイプの context clue について演繹的に指導した後で、未知語にアタックさせるというケースが多かった。しかし今回は帰納的な指導法について述べてみたい。その理由は、context clue を使う場合と使わない場合との影響を学習者に比較させながら、未知語推測を指導していきたいことと、たとえ意図的に作られた文脈を使うにしても、実際にいろいろなタスクの中で問題解決の形で clue の種類を経験させた方が、自分の使いこなせる道具になるだろうと思われるからである。では、前任校で実際に行なった指導の手順について、指導上の注意点とともに述べることにしたい。

#### 5. Reading Strategyに関する理論的研究について

実際の手順について語る前に、reading strategy における context clue 指導の位置付けについて少し述べておきたい。まず、reading strategy を2つに大別すると、1) text level と2) word level から成る (Barnett 1988: 150)。前者は主に読み進む文章全体に関わるもので、特に、文章のスキーマを活性化させるためのレベルである。これに含まれるストラテジーは、文章に関する背景知識を増やしたり、内容理解のためにタイトルやイラストを利用したり、目的によって読み方を変える方法等がある。後者は主に語の識別に関わるもので、それには、語彙の意味を理解するために文脈を利用したり、未知語の品詞などを調べたり、語形や派生語などから意

味を推測する等のストラテジーが含まれる。問題にしている、context clue を利用した reading strategy は別の言葉でいえば、word identification strategy という事ができ、これは、読み手が語や語群に意味を割り当てのに用いるプロセスと定義される (Walker 1983: 293)。また、これまでの未知語推測に関する contextclue の利用についての研究は、主として2つの方向にわかれており、それは、1)具体的な利用されるべき context clue の種類に関するもの (Honeyfield 1977, Kruse 1979, Steinberg 1978, 平野 1981, Hirano 1983), 2)context clue 利用の有効性について調査したもの (Barnett 1986, Xiaolong Li 1988, Adams 1982, Potter 1982 (about L1)) である。したがってここで重要な事は、context clue を利用する学習者ストラテジーの有効性の度合いについてはいまだ決定的ではなく、数々の実験でも議論の余地がある、と報告されている事である。逆に一方で、それほどこのストラテジーが未知語推測には有効では無いのではないかと報告もある。Jenkins et.al.(1984: 707) は、低頻度の語彙の文脈利用度を調査し、文脈利用によって幾つかの未知語が学習者によって推測され、また、文脈の中で同じ未知語の出現頻度を増やして語彙の学習は確かに進んだが、しかし期待した程ではなかったと言い、これは L1 の例ではあるが、Schatz and Baldwin (1986: 441) は、これまでの研究は文脈拘束力の強い人工的な context を用い、しかも頻度の高い語彙についてその有効性を実験してきたのであるから、良い結果が出て当然だと述べ、自然発生的な文脈を用い低頻度語を用いて実験を行なった。それによると、学習者にはほとんど文脈の手がかりは効果をもたらさなかったと報告している。これなどは未知語推測に関する context clue の指導を過大評価しないようにとの警告であろう。Jarvis (1979) もこのストラテジーに対する有効性については条件付きで是認している、つまり、このストラテジーは advanced readers には十分有効な手段となりうるが、しかし beginners には必ずしも適切な方法ではないと述べている。したがって、要はこのストラテジーが有効になる学習者の条件、特にレベルはどこに設定されるべきかということが問題となる。Nation (1990: 159-160) は 2~3000 の語彙をマスターすれば、学習者は自分の出会う語を推測する reading skill を用いることができると述べ、また、個人的なレベルで未知語推測ができない学習者でもそのストラテジーを教わる事ができ、そしてその能力を発達させることができると述べている。このようなストラテジーを学習者が学ぶ意義を彼は、普通、学習者が出会ってリーディングの際に苦勞する低頻度の数千の語彙は出会うと言っても1度か2度であり、その使用領域の狭さから言ってもいちいち覚えるのは時間の浪費であり、それらの語を直接教えるよりもこれらの語を扱うストラテジーを教えた方が良いからであると言っている (Nation 1990: 159)。高梨・高橋 (1987: 77) も、幾つかの実験例を引いて、「外国人学習者も訓練によってある程度文脈の手がかりを活用する能力を上昇させることが出来る」と述べている。これを日本人の英語教育現場に置き換えてみると、2~3000語の語彙を習得した学習者を対象となると、このストラテジーを指導するのに適した学年として、高校2年生あたりからと言う事になる。なぜなら、現行の学習指導要領で規定されている新語の上限が、中学3年間で1050語、高校3年間で1900語、合計2950語で、2000語マスター以上という、その時期以上ということになるからである。

## 6. 具体的な手順

前置きが長くなったが、これから昨年筆者が現場で実施した context clue 利用の1つの指導例を、具体的な手順を例に引きながら紹介してみたい。

帰納的に未知語推測に際しての context clue の使い方をマスターさせるために、基本的には、段階的に文脈を増やししながら、生徒に、文脈内から集めた情報が多いほど未知語推測が正確になることを意識させることを一連の活動の主眼とした。

まず、1枚のカードを与える。それは次の様なものである。

語 彙	語 形	前 後	品 詞	広文脈	確 定	他の意味	clue

左から右に進むに従って、生徒は1つの段階でそれぞれ未知語の推測をし、その推測した意味を書いていく。そして確定の欄には、最終の正しい意味を書き、これによって今までの自分の推測が正答に近いか遠いかを一目で判断できる仕組みになっている。その横の clue の欄には、実際の意味推測に寄与した手がかりを書く。これを後で教師から clue についてのパターンの説明があった時、どのストラテジーを使ったかで確認をする。最後に当該語彙の他の意味を、辞書でチェックする際に「他の意味」の欄に書き込むわけである。

次に具体的にこのカードを使つての実際上の手順と、その指導の際の注意事項について記すことにする。ステップは全部で6つに分かれる：①語形上の手がかりで意味を推測させる。②未知語の直前直後の文脈を読ませて推測させる。③未知語の品詞は何かを考えさせる。④より大きな文脈まで広げて未知語の推測をさせる。⑤推測した意味のチェックをさせる。⑥ context clue のパターンの教授。

この活動の目的は次の2つである。

1. 語の形からだけでは誤った推測になりがちなことを認識させること。
2. 文脈の中から様々な情報を集めて未知語推測を行なわないと、偶然の推測に終わってしまい、推測後の意味の正確さがかなり落ちることを認識させること。

まず教師の側の準備段階として次の2点に注意して、対象として取り上げる未知語の選択を行なった。それはまず第一に、その語彙がテキストのトピックスを理解する上で重要なものであるか否か、そして十分に文脈の中にその意味を解く情報を含んでいるかどうか、第2番目に、生徒が読み進む時の理解の障害となりやすいものかどうかである。次に、ステップ別に、実施上の注意点も含めてその要点を述べてみることにする。

### ① 語形上の手がかりで意味を推測させる

接辞や語幹などに分析して語彙の意味を類推するというストラテジーは未知語推測の際によく用いられ、有効であると考えられているが、しかし逆にマイナス要因に作用することもある。

つまり、形は似ているが意味の異なる語と、誤って解釈してしまうケースが多いということである。例えば、habitat と habit などその代表例である (Nation and Coady 1988: 107)。特に語彙力が不足していて、未知語の周りの文脈を利用できない生徒はしばしば語の形だけで、その意味を判断してしまいがちである。後のステップでの文脈利用の有効性を極めさせるためにまずこの段階を用意した。

② 未知語の直前直後の文脈を読ませて推測させる

未知語推測の有効な手がかりになる context clue は、多くは未知語の前後 5～10語以内にあるということがしばしば言われ、また、未知語の説明部分も関係詞節で後続していることも多い。したがって、まずここは未知語の前後の文脈を調べさせることにウエイトを置くためのステップである。そして、この際イタリック体の語や、コーテーション・マークやダッシュなどで囲まれた語にも注意を向けさせたい。(explanation や definition などの context clue がこのレベルには多い。)

③ 未知語の品詞は何かを考えさせる

特に語の文中の機能に手がかりを得るためにこのレベルを設定した。普通、外国人のわかりにくい筆跡の手紙などを読む時、その内容の推測の際に各語の品詞峻別の判断が大きくものをいうことはよく知られているところである。

④ より大きな文脈にまで広げて未知語の推測をさせる

より広い文脈に関わる context clue には、cause and effect, contrast, generalization, detail explanation などがあり、また、文についてのトピックスやアウトライン、それにタイトルさえも未知語の意味を推測する上での手がかりとなる場合もある。このレベルは主にスキーマや内容についての前提知識と関連する段階である。

⑤ 推測した意味のチェックをさせる

このレベルは主として辞書を用いて意味をチェックする段階である。辞書を引かせる前に、英英辞典などに載っている語彙についての定義を与えることも有効である。また、この際、未知語に当該文脈とは違う意味があれば、それも合わせて確かめさせるとよい。

⑥ context clue のパターンの教授

context clue のタイプには、synonym, antonym, cause and effect, description, example 等の幾つかの種類があることが知られているが (Nattinger 1988: 63), 必ずしもすべてにおいて、未知語の clue がこれらにはっきり当てはまるとは限らないので、代表例のみを例文とともに提示するのがよいと思う。

その他、グループワークなどを利用して、未知語の推測状況を班別に発表させたり、また、未知語推測の根拠となった具体的な clue を発表させるのもよいだろうし、その結果を材料にクラス内で discussion させる活動も可能である。この活動の目的はあくまでも、文脈中の手がかりが未知語推測に重要な情報として役立つということを生徒に認識させることにある。1 本立ちした fluent reader 育成のためにこれからもますますの本ストラテジーの開発がのぞまれる。

## 7. Good reader と Poor reader との文脈利用の差異について

context clue を利用した学習者の語彙認知について研究しているうちに、文脈利用に関する

good reader と poor reader の差異について興味が生じてきた。先にも述べた通り、学習者への context clue reading strategy の教授に際しては彼らのレベルを考慮しなければならない。このレベルとは、とりもなおさず、読解における文脈利用法レベルの差異であると言える。したがって、ここで文脈利用における両者の差異をみておくことは、今後の指導上、意義のある事であるといえる。これはそのどちらか（つまり、例えば good reader にということ）にそのストラテジーを指導すべきであり、また、一方にはすべきではないということを意味しているのではない。つまり、そのレベルに合わせた指導の手順というものがあるのではないかということである。Potter (1982: 16) も言っているように、poor reader は文脈的な情報をなかなか利用出来ないが、それは、文脈をうまく利用できないということであり、決して利用しようという気持ちがないということではない。以下に文献にあらわれた両者の差異の幾つかを示してみたい。Hosenfeld (1977) は、その両者の差異について次の面を例証した。それは、広い文章スパンで読み進めるか否か、そして、あまり内容に重要ではない未知語は飛ばしながら読むか否か、あるいは新出語彙の意味を文脈から類推できるか否かという点である。一方、リーディングの text 内容を想起させるための script activator の有効度を調査した Adams (1982: 158) は、文章理解において script activator が有効であったのは主に low language proficiency の readers であったと報告している。そしてその理由として、high level の readers は text 中の linguistic cue から自ら話の文脈を作る事が出来るので、visual なものも含めた cue に頼る必要がないからであると述べている。これに関連して、Stanovich et.al. (1981) と Juel (1980) が good reader と poor reader との文脈利用の目的の違いを指摘した論考は興味深い。彼らによれば、good reader は文脈依存度の少ない、低頻度の語彙を認知するためだけに文脈に頼る、なぜなら、彼らはすでに十分な語彙の知識も、背景的知識ももっているからである、それに対し poor reader は、good reader と比べて、頼るべき reading skill (or strategy) の数や decoding のための knowledge が乏しいために、それらの穴埋めのために文脈だけに頼らざるをえないということである。つまり、good reader は文を読み進みながら文の内容の論理関係を再構成する事ができ、自ら schema を活性化させながら文の内容を長期間記憶する事が出来るので、文脈利用の意識を彼にとっての未知語推測に集中出来るのではないだろうか。一方、poor reader の方は文章中の語彙認知が出来ず、文章内容を短期間しか記憶出来ないのも、文脈利用による未知語推測もできず、それ以外の要素に読解の手がかりを求めることになるのではないだろうか。また、高梨・高橋(1987: 58)は、自分の理解度をモニター出来ないことを poor reader の特徴の1つとしてあげているが、筆者が提案した前述の帰納的な context clue 利用ストラテジーも、彼らのこの特徴を少しでも改善することを目的としている事を最後に付け加えておきたい。

## 8. お わ り に

以上、これまで語彙指導に関して様々な事を話題にしてきたが、基本的にはどのようなアプローチをとるにせよ、学習者が少しでも文章の理解を高めるための一定の語彙指導の際の考え方というものがあるはずである。その意味で、以下の Nagy and Herman (1987: 33) による「理解を伸ばすのに適した語彙指導の条件」は参考になる。それを引用して本稿の結びとした

い。

1. 教授する語を多面的に学習者に提示する。
2. meaningful context の中で語を提示する。
3. 語に関する様々な情報を与える。
4. 語に対する学習者のスキーマを活性化する。
5. 語彙学習のプロセスに学習者を積極的に取り組ませる。

#### 引 用 文 献

- Adams, S.J. (1982). Scripts and the recognition of unfamiliar vocabulary: Enhancing second language reading skills. *Modern Language Journal*, 66 (2), 155-59.
- Barnett, M.A. (1988). Reading through context: How real and perceived strategy use affects L 2 comprehension. *Modern Language Journal*, 72 (2), 150-62.
- Freebody, P. and Anderson, R.C. (1983). Effects on text comprehension of differing propositions and locations of difficult vocabulary. *Journal of Reading Behavior*, 15 (3), 19-39.
- Gershman, S.J. (1970). Foreign language vocabulary learning under seven conditions. PH. D thesis. Columbia University.
- Hirano, K. (1983). Classification Schemes and Empirical Study of Context Clues. *JACET Bulletin*, No. 14, 1-28.
- Holley, F.M. (1973). A study of vocabulary learning in context: the effect of new-word density in German reading materials. *Foreign Language Annals*, 6, 339-47.
- Honeyfield, J. (1977). Word frequency and the importance of context in vocabulary learning. *RELC Journal*, 8 (2), 35-42.
- Hosenfeld, C. (1977). A preliminary investigation of the reading strategies of successful and unsuccessful second-language learners. *System*, 5, 110-23.
- Jarvis, G. (1979). The Second Language Teacher: Reconciling the Vision with Reality. 77-104. in Watten Born, ed., *Northeast Conference Report: The Foreign Language Learner in Today's Classroom*. Middlebury, VT: Northeast Conference on the Teaching of Foreign Languages.
- Jenkins, J.R., Stein, N.L. and Wysocki, K. (1984). Language vocabulary through reading. *American Educational Research Journal*, 21 (4), 767-87.
- Judd, E.L. (1978). Vocabulary teaching and TESOL: a need for reevaluation of existing assumptions. *TESOL Quarterly*, 12 (1), 71-6.
- Juel, C. (1980). Comparison of word identification strategies with varying context, word type and reader skill. *Reading Research Quarterly*, 15 (3), 358-76.
- Kameenui, E.J., Carnine, D.W. and Freschi, R. (1982). Effect of text construction and instructional procedures for teaching word meanings on comprehension and recall. *Reading Research Quarterly*, 17 (3), 367-88.
- Kruse, A.F. (1979). Vocabulary in context. *ELT Journal*, 33, 207-13.
- Lado, R., Baldwin, B. and Lobo, F. (1967). Massive vocabulary expansion in a foreign



- language beyond the basic course : the effects of stimuli, timing and order of presentation. *Washington, D.C. : U.S. Department of Health, Education, and Welfare, Project NO. 5-1095.*
- Marks, C.B., Doctorow, M.J. and Wittrock, M.C. (1974). Word frequency and reading comprehension. *Journal of Educational Research*, 67 (6), 259-62.
- Nagy, W.E. and Herman, P.A. (1987). Breath and depth of vocabulary knowledge : Implications for acquisition and instruction. in Mckeown, M.G. and Curtis, M.E. (eds.) (1987). *The Nature of Vocabulary Acquisition*. 19-35. Erlbaum, Hillsdale, NJ.
- Nation, I.S.P. (1990). *Teaching and Learning Vocabulary*. Newbury House Publishers.
- Nation, I.S.P. and Coady, J. (1988). Vocabulary and reading. in Carter, R. and McCarthy, M. (eds.) *Vocabulary and Language Teaching*. 62-82. Longman.
- Nattinger, J. (1988). Some current trends in vocabulary teaching. in Carter, R. and McCarthy, M. (eds.) *Vocabulary and Language Teaching*. 62-82. Longman.
- Potter, F. (1982). The Use of the Linguistic Context : Do Good and Poor Readers Use Different Strategies? *British Journal of Educational Psychology*, Vol. 25, 16-23.
- Schatz, E.K. and Baldwin, R.W. (1986). Context clues are unreliable predictions of word meanings. *Reading Research Quarterly*, 21, 439-53.
- Stanovich, K.E., West, R.F. and Freeman, D.J. (1981). A longitudinal study of sentence contexts in secondgrade children : Test of interactive-compensatory model. *Journal of Experimental Child Psychology*, 32, 185-99.
- Steinberg, J.S. (1978). Context clues as aids in comprehension. *English Teaching Forum* 16 (2), 6-9.
- Tierney, R.J., Readence, J.E. and Dishner, E.K. (1990). *Reading Strategies and Practices : A Compendium*. Allyn Bacon.
- Walker, L. (1983). Word identification strategies in reading a foreign language. *Foreign Language Annals*, 16 (4), 293-99.
- West, M.P. (1941). *Learning to read a foreign language*. Longman.
- Xialong, L. (1988). Effect of contextual clues on inferring and remembering meanings of new words. *Applied Linguistics*, 9, 402-13.
- 平野絹枝(1981)「大学生の Context Clue の把握について」,『中部地区英語教育学会紀要』No. 11, 231-52.
- 高梨庸雄・高橋正夫(1987)『英語リーディング指導の基礎』 研究社出版.

## On the Use of Meaning Vocabulary Strategy : Some Types of Exercise for Practicing Guessing Word from Context

Takao FURUYA\*

### ABSTRACT

Some theorists refer to receptive acquisition of vocabulary and recommend that students learn word-guessing strategies in order to enlarge their vocabularies. This paper looks briefly at directions in research on the use of the linguistic context when students learn vocabulary through reading. The author also investigates what strategies good and poor readers use when they are making use of the linguistic context.

---

\* Division of Languages : Department of Foreign Languages